



中央図書館だより

Hon do?

NO.90
(令和3年10月12日発行)

特集コーナー紹介



児童特集コーナー（1A棚）
◆おばけとカボチャとハロウィーン

いろはにホットスペース（7棚）
◆体に良いこと悪いこと

一般特集コーナー
◆BPM Reading
“ドキドキ”をたよりに本を読もう！
(特設1)

◆糖尿病予防
(健康増進課コラボ) (特設2)
◆精神保健福祉普及運動
(福祉課コラボ) (特設5)

中央図書館は
10月12日(火)より
通常開館しました。
複合施設こらす天井部分の緊急点検が終了いたしました。利用者の皆さんにはご不便をおかけしました。



■新着本紹介■

新刊の一部をご紹介します

一般書

- 『がん消滅の罌 [2] 暗殺腫瘍』 岩木一麻 (宝島社)
- 『地中の星』 門井慶喜 (新潮社)
- 『魔法のトイレ体操』 小林弘幸 (新星出版社)
- 『鼠子待の恋』 (風烈廻りとカ・青柳剣一郎 54) 小杉健治 (祥伝社)
- 『習慣化は自己肯定感が10割』 中島輝 (学研プラス)
- 『マンガでわかる! 税金のすべて'21~'22年版』 須田邦裕 (監修) (成美堂出版)
- 『見て楽しい育てて美味しい野菜の再生栽培』 大橋明子 (産業編集センター)

児童書・絵本

- 『アニメコミック おしりたんてい8』 (ポプラ社)
- 『山火事のサバイバル1』 ボドアルチング (朝日新聞出版)
- 『ようかいむらの すんちゃかおんがくかい』 たかいよしかず (国土社)
- 『10歳のミッション』 斎藤孝 (幻冬舎)
- 『こわ〜い空想科学読本』 柳田理科雄 (原作・監修) (KADOKAWA)
- 『生きものはみんなちがっておもしろい』 ニコラ・ティピス (文) (化学同人)
- 『都会のトム&ソーヤ18』 はやみねかおる (講談社)
- 『こうじてます こつこつこーん』 くにすえたくし (え) (視覚デザイン研究所)

■中央図書館カレンダー■

10月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

11月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

※市内の感染状況により、おはなし会などのイベントは中止になる場合があります

- は休館日
- ◇しあわせおはなし会 10:30~
- おはなし会 14:00~
- 古文書学習会 14:00~
- △みずのわ読書会 10:00~

問合せ先 天草市立中央図書館
TEL: (0969) 23-7001

【開館時間】 火~金曜9時~19時

土・日、祝日9時~17時

まちはみんなの遊園地 in 銀天街に移動図書館車がまわります!



銀天街アーケード内で開催される同イベントに中央図書館から移動図書館車きらきらいるか号がおじゃまします。

【日時】10月17日(日) 10:00~14:00

【場所】銀天街アーケード内(本渡中央商店街)

移動図書館車は、図書館から遠い地域や学校などの施設の方に本を届けるため巡回するサービスです。市内図書館の貸出カードをお持ちの方は当日利用できます。移動図書館車に馴染みのない方も体験できる機会ですので、ぜひお越しください。

(※市内の新型コロナウイルス感染状況により中止になる場合があります)

河浦図書館ビブリオトーク

参加者が読んで面白かった本を紹介し合う交流会に参加しませんか。

【日時】10月17日(日) 午後1時30分~2時30分

【場所】河浦図書館(市役所河浦支所内)

【対象】小学5年生~一般【定員】6名(先着順)

【準備物】紹介する本(まんが可、雑誌不可)

【申込方法】・図書館カウンター

・電話 74-8111

・二次元コード

【申込・問合せ】河浦図書館



▶申込み



戦争体験記第2弾が完成しました

天草で戦争を体験された方からお話を聞き、郷土資料として残す企画の第2弾『私の戦争体験記「欲しがりません、勝つまでは!」~大東亜戦争時のあれ・これ~』(吉野エミ子氏著)が完成しました。戦争体験者が少なくなる中の貴重な記録として、図書館で保存していきます。貸出も可能です。



▶申込み



朝夕は風も優しく感じる気候になりました。この季節がずっと続いてほしいと毎年願うのですが、あっという間に過ぎていきますね。

最近ではコロナの感染者も減少し、県独自のリスクレベルも一段階引き下げられ、出かけるにもよい季節になりました。私も次に来ると言われる第6波までの間に少し動けるかなどの思いもありましたが、先日病院勤務をしていた友人から『臨床の砦』の本をすすめられ、思慮に欠けた自分を反省しました。

著者の夏川草介さんは長野県で消化器内科医としてコロナの診療に携わる現役の医師です。今年の1月、新型コロナ第3波当時、感染症指定医療機関ではあるが専門医も呼吸器内科医もない地方の公立病院の状況を小説として出版されました。

本来なら入院させるべき患者さんを自宅待機にしなければならない「あり得ない医療」。高齢者介護施設のクラスターにより、認知症患者を看護(介護)しトイレやお風呂などの清掃に追われる看護師。患者さんに直接触れない(タブレット診療)コミュニケーションをとれない診療に「コロナは肺を壊すだけでなく、心も壊す」と、つい「この戦、負けましたね」との言葉を漏らす医師。「負け戦としても、だ」と、またコロナ患者さんと向き合い続け、「この病院は、コロナという未知のウイルスと戦う最前線の小さな砦だ」と医療従事者達。

夏川さんは、休みもなく日々命がけの医療を行う傍ら執筆されました。出版の際、医療機関や行政に対し「変化に対応する感覚を持ってほしい」として「今も耐えながら頑張っている人達がいることが伝わってほしい」と語られていました。

重いテーマですが、関係者のやさしさが伝わる読みやすい小説となっていますので多くの方に読んでいただきたいと思います。

中央図書館は施設点検のために休館していましたが、12日より開館いたしました。

特設コーナーで様々な本の紹介をしています。日頃見かけない本との出会いもあるかもしれません。ご覧いただき秋の夜長を楽しんでいただけたら嬉しいです。

【文・中央図書館長】